教師・学習者の共生の場
―笑いでつながるバリアフリーの小噺発表会―

遠藤　真理（バルトルディー高校，フランス）
加村　彩（おひさまあはは，英国）
高木　三知子（ブラッセル補習授業校，ベルギー）
ブランド　那由多（ミドゥカ，スイス）

要旨

落語のマクラなどで使われる「小噺」は，特別な舞台や道具がなくとも日本文化を創造的に体験できる。笑いや非言語的表現という「人間」に共通する要素を含むため，日本語レベルや母語，年齢などの障壁がなく，出演も鑑賞も誰もが楽しめる活動である。2020 年末「日本語教師のための小噺ワークショップ」で筆者らを含む 20 数名の日本語教師が出会い，協働で国際的なオンライン小噺発表会を立ち上げた。背景の違う学習者が対等に参加し，優劣や順位をつけずに各作品を鑑賞しあえる空間を作り，さらに日本語能力を問わず楽しめるよう工夫を凝らした。二つの事例を基に，周辺を巻き込みながら「実践集団」として発展しているこの活動の内容を紹介し，共生の場の一つとしての役割について考察する。

【キーワード】小噺, 協働学習, アクティブラーニング, 創造性, 共生の場

Keywords:　Kobanashi, peer learning, active learning, creativity, community

1　小噺と日本語教育

1.1　小噺と日本語教育

小噺とは，落語口演のマクラなどで使われる，数行の短い笑い話である。日本の古典芸能とのつながりから，色々な形で日本語教育に取り入れるのに適しており（図1），短いために，初級から扱える素材である（畑佐 2010ab，Hatasa 2012）。実際に小噺を覚えて，舞台の上で演じることで，初級の段階から日本文化を自分が主役となって「内側から」実体験しながら，日本語

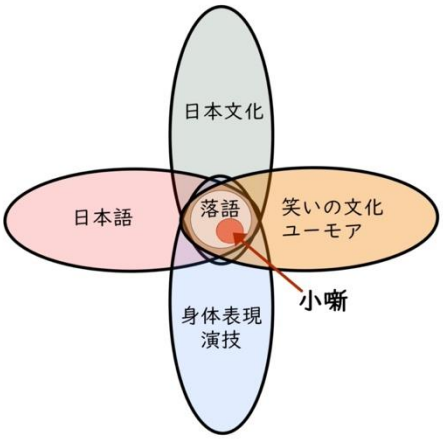

図1：小噺の位置付け

で発表する達成感を味わうことが出来る。また，笑い話であるため，理解することや伝えることを楽しみながら学習できる（畑佐 2010a，2010b）。

1.2　小噺を日本語授業に取り入れる理由

教室内にはたくさんの壁が存在する。小噺の世界はその壁を取り払う力を持っている。壁が取り払われた状態をここでは「バリアフリー」と呼ぶことにする。

- 「レベル差のバリアフリー」
  学習者が自ら気に入った小噺を選んでいくため、初心者でも上級者でもチャレンジできる。
- 「学習者の間のバリアフリー」
  学習者同士で練習し，教え合い，日本語をアウトプットするので，学習者主導の学び合いが発生する。お互いのことをより良く知り，尊重し合うことで，横の関係が生まれ，クラスがまとまって雰囲気が良くなる。
- 「学びの立場のバリアフリー」
  教師も学習者も同じ学ぶ立場となる。お互いに試行錯誤し，失敗を繰り返しながら成長していく。

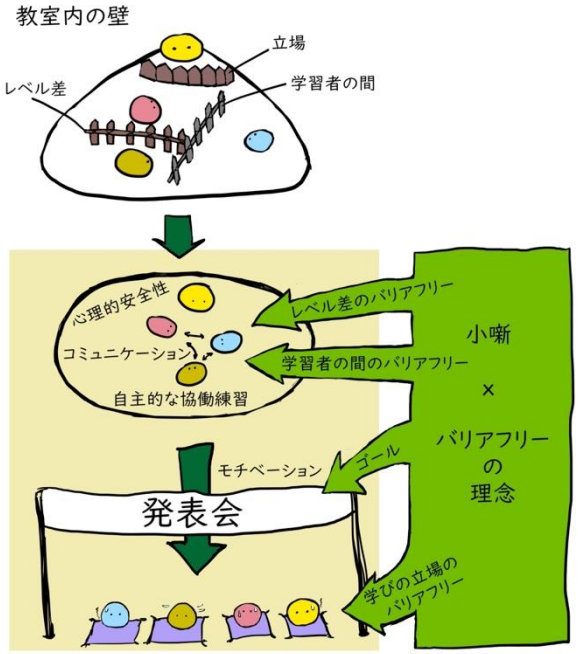

図 2：小噺の効果

授業に小噺を取り入れると，このようなバリアフリーによって心理的安全性が生まれ，学びやすくなる。そして，意図する以上にコミュニケーションの機会が増え，日本語を身近に感じてもらえる。しかも，何度も繰り返し練習するのでいつまでも覚えていられる。また，発表会というゴールを設定することでどこに向かっているのか明確になり，学習者のモチベーションが上がる。

2　国際小噺合同発表会（KKGH）

2.1　KKGHとは

国際小噺合同発表会（頭文字を取り，以下 KKGH）は，小噺や小噺に関連のある

パフォーマンスを楽しむことを軸にしている活動である。2021 年に発足し，現在は，月に一回の「こばなし Dojo!」と年に一回の発表会（表 1）を開催している。「こばなし Dojo!」（3.2 参照）では気軽に小噺に触れられる場を提供すること，発表会は，小噺を演じる舞台を提供することを目的としており，様々な分野の日本語学習者や教師，その家族や友だちなどが出演している。

表 1：KKGH 発表会

	第一回	第二回	第三回
時期	2021 年夏（6・7 月） 2 日間	2022 年春（4 月） 1 日間	2023 年春（4・5 月） プレミア公開後 1 週間
形式	Zoom 発表会・交流会 アーカイブ配信 （Vimeo） 期間限定，関係者用	Zoom 発表会・交流会 アーカイブ配信 （Vimeo） 期間限定，関係者用	YouTube 公開 Zoom 交流会（連日）
参加者	学習者 継承語教育 中等教育 高等教育 成人教育 学習者の家族	学習者 継承語教育 中等教育 高等教育 成人教育 学習者の家族 日本の学生（交流）	学習者 継承語教育 中等教育 高等教育 成人教育 学習者の家族
参加国，参加者数 （リピーター数）	8 ヶ国　88 名	9 ヶ国　64 名 （19 名）	8 ヶ国　50 名 （18 名）

毎年少しずつ形態を変えながら，一番無理なく楽しく参加・鑑賞・運営しやすい発表会を目指している。これまでは，小噺や，小噺に関連のあるパフォーマンスのビデオを集め，一本にまとめてオンライン（Zoom, YouTube Premiere など）で実施した。日本語ができなくても観賞が楽しめるよう，字幕など多言語対応の工夫をしている[1]。

コンクールではなく，あくまでも「発表や鑑賞を楽しむ」会であるため，ビデオの長さや内容，フォーマットはある程度決まっているが，参加制限はなく，事前審査も順位付けもない。ただし，原則として教師の参加出演を必須としている。また，国際交流基金ロンドン日本文化センター（以下 JFLO）の後援を受け，初参加者全員に参加賞としてオリジナル扇子と手ぬぐいを贈っている。KKGH の運営は 2023 年現

在日本語教師 5 名によって無償で行われており，発表会や「こばなし Dojo!」の参加費もない。

ホームページでは，発表会で上映したビデオの一部や，小噺関連の素材や情報を提供しており，教師が自主的に小噺を授業に取り入れてみることへの足場となっている。

再度，会の特徴をまとめると，緩やかな繋がりの中で自主的に運営されていること，優劣を決めるのではなく，それぞれの参加者のパフォーマンスを楽しむことを中心に置いていること，年齢や日本語レベル，母語や立場に関係なく参加できることがある。出来るだけオープンで，だれにでも関わりやすく，参加しやすい，つまりバリアフリーな活動になるような工夫をしている。

2.2　活動の背景

KKGH の活動のルーツは，JFLO が 2020 年に企画・主催した「教師のための小噺ワークショップ」[2] にある。コロナ禍の中，オンラインで集まった筆者らを含む 20 数名の参加者は幅広く多様な現場で活動していた。初対面の参加者も多く，小噺や落語の知識や経験にもばらつきがあった。教室に例えると，レベルもニーズも多様な個人の集まった「クラス」であった。しかし，ワークショップそのものが，継続的な教師コミュニティへの発展を視野に入れたデザインで，参加者のやりとりや協働，情報や実践の共有を促す仕掛けがちりばめられていたため，参加者同士の交流が生まれた（藤光　2021）。ワークショップでは，参加者が学習者の身になって小噺を演じて見せあった。指導のポイントを自らのビデオの例で体験し，事後課題で，学んだことを自分の教育現場で応用した。参加者同士のつながりから，機関を越えてのネットワークが生まれ，その動きが KKGH のプロジェクトへと発展していったのである（川島 2022）。

3　小噺活動の具体例

本セクションでは，KKGH の小噺活動での具体例を二つ紹介し、それを基に、バリアフリーの場と、そこでの学びについてまとめる。

3.1　「おひさまあはは」

イギリスブライトンの日本語グループ「おひさまあはは」では，日本に繋がりのある子ども達，日本に興味のある子ども達が日本語・文化を楽しく学んでいる。その中で一つの活動として取り組んだ小噺実践と KKGH との関わりについて報告する。

JFLO のワークショップに参加した筆者のひとり，加村が学んだことを生かし，小噺を活動に取り入れた。2021 年 4 月には，「おひさまあはは」オンライン小噺発表会を開いた（Kamura 2022）。コロナ禍で実際に会うことが困難であった日本など遠く離れた家族や友人に視聴してもらい，交流することができた。小噺の練習や撮影では家族ぐるみで取り組んだこと，それぞれの才能を持ち寄り絵の得意な生徒がポスターを作成したり，翻訳やスライド作りも生徒主体の豊かな経験となった。また学年を超え，普段は活動日が異なり接点のない小学生と中学生の交流の場となり，年長者が年少者のロールモデルとなった。子どもの練習を見ていた親たちの中に，自分でも小噺にチャレンジする者が出てきた。英国人の父親が短い笑い話を元に演じた自作小噺「羊さん」は今や KKGH 参加者の間で人気の噺のひとつになっている。

2022 年・2023 年には対面で発表会を開催することができた。自由参加の為，全員の発表は不可能かと思われたが，その日に参加した子ども達，親たち全員が皆の前で小噺を披露することができた。パンデミック以降，数少なくなった対面でのイベントで，皆にスポットライトが当たり，子ども達は普段は見られない一面をお互いに見ることができ，また大いに褒められ，それが自信につながった。

新しいチャレンジとして，それらの小噺発表会の作品で，KKGH の発表会に一部の子ども達，親たちが参加した。生徒が，発表会ライブで 3 ヶ国語でコメントをしたり，余興としての漫才にも挑戦した。マルチリンガルの子ども達が言語能力を発揮・活用し，イベントで与えられた役割を果たし，出演できたことは自分の持つ言語能力に気づき，客観的に認めることにつながった。

子ども達にとって他の参加者の小噺を視聴できたことは刺激的であった。自分と同じ小噺を見たり，他の人のアイデアに驚いたり，国や年齢を超えていろんな人が日本・日本語に繋がっていることを実感できた。発表会を通して世界の人々と交流ができたことも子ども達の記憶に強く残っているようだ。以前に別のコンクールで

グループ応募した作品が選ばれず，フィードバックも得られず残念な思いだけが残ってしまった。応募者全て出演でき，認められ，達成感が得られる KKGH の発表会に教師として大きな意義を感じている。

KKGH を通して，子ども達，親たち，家族，教師も世界とつながり，仲間を巻き込み，自分たちの世界が広がった。

3.2 「こばなし Dojo!」

KKGH では，月に一度，誰でも気軽に小噺を体験できる場として，「こばなし Dojo!」（Zoom で 1 回 40 分）を開催している。2021 年 10 月から始めて，2023 年 9 月末までに 20 回開催した。一回の平均参加人数は，運営メンバーを入れて 7，8 人で，15 カ国からのべ 111 人が参加した。

「こばなし Dojo!」この主な活動は，KKGH のホームページの資料・リンクのページにある，簡単な小噺のリストの中（現在 23 話）から，演目を選んで，各自練習後，発表，コメントし合うというものである。

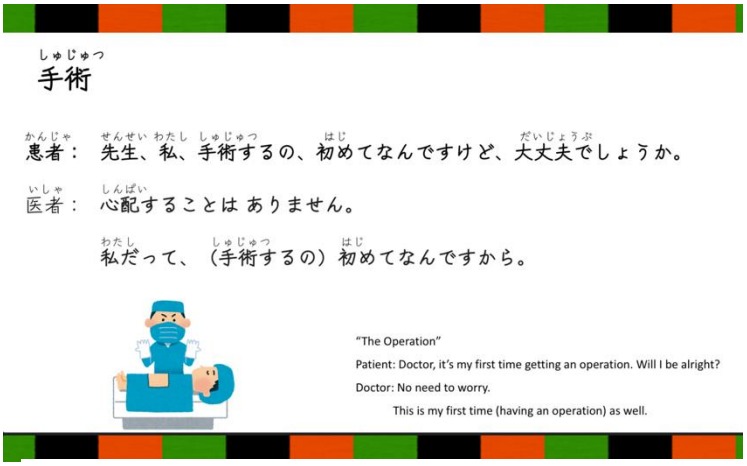

図 3：小噺の例

例えば，左の「手術」という小噺を例に挙げると，演じる前には，しっかりセリフを覚えて，この患者は，男性か，女性か，年齢はいくつぐらいの人か，医者はどのような性格なのか，また，二人は

両耳を大やけどした男性が病院に運ばれた。
どうしてこんなことになったのですか？
-私はシャツにアイロンをかけていました。
突然、電話が鳴り出したんです。機械的にアイロンを耳に当てました。
- 右耳は大丈夫でした。でももう片方は？
- 救急車を呼ぼうと思ったのはそのときだった。

図 4：日めくりカレンダーと機械翻訳の日本語テキスト

どこで話しているのかなど，想像力を膨らませて，稽古する。各自が創造性を働かせることで，同じ小噺でも，ひとつとして同じになるものはない。皆で練習することで，新しいアイデアが次々と浮かぶおもしろさがある。

第 18 回目の「こばなし Dojo!」では，新しい試みもあった。そのことについて詳しく述べる。ある日，筆者のひとり，高木のベルギー人の夫が図 3 のような家にある日めくりカレンダーの裏にフランス語のジョークを見つけた。夫は高木の KKGH の活動に協力的で 3 回の KKGH 参加のための小噺演技のビデオ撮影なども手伝ってくれており，元日本語学習者として小噺に興味をもっている。この時までに数回フランス語のジョークを見つけて持って来てくれていたが，今回は，面白い小噺になりそうだと思った。そこで，高木は，翻訳アプリで日本語にして，そのまま，このジョークを「こばなし Dojo!」に持って行った。当日の「こばなし Dojo!」は 8 人の参加者だったので，4 人ずつ 2 つのグループに分かれて，このフランス語のジョークを小噺にしてみるという新しい試みを行った。高木はグループ 2 にいたのだが，マレーシアからの非母語話者の参加者のアイデアで，しぐさ，動作をつければ，台詞はどんどんいらなくなっていった。高木が考えていた機械翻訳に影響されたものとは全く違った下記の作品になって，本当に面白かった。

表 2：完成した小噺作品

グループ 1 男 1（両耳をおさえながら）「痛い，痛い，痛い…。痛いんです，せんせい！」 医者「どうしたんですか？ちょっと見せてください… うわぁ，ひどい火傷ですね，どうしたんですか」 男 1「ワイシャツにアイロンをかけていたんです。そしたら，突然，電話が鳴って，思わず出ちゃったんです。」（アイロンを耳に当てる） 医者「でも，もう片方は？」 男 1「だから，救急車を呼んだんですよ」
グループ 2 病院で： –どうしたんですか？両耳…？ – ワイシャツにアイロンをかけていたんですが，電話が鳴って，それで，ついアイロンを耳に…。（右耳にアイロンを当てる動作） – はああ？　でも，もう片方は？ – 救急車を呼ぼうとして…。（左耳にアイロンを当てる動作）

最後にグループごとにできた小噺を発表し合った。グループ 1 には，フィリピンから「こばなし Dojo!」には 2 回目の参加の学習者がいたのだが，一人での発表は自信

がないということで，それを聞いた運営メンバーの一人が，「じゃ，私と二人でやってみよう」と提案し，見事二人で演じる小噺ができあがった。どちらのグループも機械翻訳とは全く異なる噺ができあがり，また，同じ機械翻訳から始めたフランス語のジョークが2つのグループで異なる小噺になったことは大変興味深い。これからも，機会があれば，ご当地ジョークを「こばなし Dojo!」で取り上げ，新しい小噺を創作していければと考えている。18回目の「こばなし Dojo!」は，これからの「こばなし Dojo!」の可能性と広がりを感じた回だった。

このように気軽に誰かと一緒に練習ができる。コメントをし合える。新しいアイデアが生まれる。笑い合える。「こばなし Dojo!」は，そんな豊かな学びの場，共生の場になっている。

3.3　さらに広がる「バリアフリー」

紹介した二つの例を見ると，「バリアフリー」は教室内に留まっていないことがわかる。つまり：

- 普段なら出会わない者同士（時間帯が違うクラス同士，世界の学習者），特定の役割を背負った者同士（教師・学習者，親・子供，母語話者・非母語話者など）が，小噺を通して知り合うことで，お互いを横並びで認識する機会になる（立場のバリアフリー）。
- それぞれが演じる小噺の世界は，既存の小噺であれ，創作小噺であれ，自分の内なる世界を使って創造するので，言語レベルに関係なく個性的な表現になる（発表内容のバリアフリー）。
- 一人で作品を仕上げることもできるが，数名で協力し合って小噺を完成させることもできる。その他に，チームで役割を決め，演じたくない者は演出やセリフ・出囃子制作などの裏方を担当するという可能性もある（川島 2023）。また，初めは気が乗らなくても，他の人達が楽しんでいるのを見てやりたくなったり，周りの人のサポートを受けて発表への決心がつく場合もある（参加することへのバリアフリー）。

また，活動の周辺から関わってくる家族がいたことも興味深い。小噺は笑いや非言語的表現という，人類に共通する要素を含むため，練習しているところを横から

見ているだけでも親しみを感じやすい素材であることを物語っている。

3.4　発表の場の意義

「こばなし Dojo!」でも，「おひさまあはは」でも，「発表」という，活動の成果を披露し，堪能する場が重要な役割を持っていた。

- 「こばなし Dojo!」の短時間の稽古後の発表は，他の人の前で演じて，それを見てもらう勇気や，瞬時に思いを言葉にする瞬発力を養う機会である。
- 「おひさまあはは」のオンライン発表会は，プロジェクトとして一つのゴールにむかって協働するきっかけになっていた。
- 「おひさまあはは」の対面の発表会では，ライブ発表ならではの「本番の力」に，その場にいた全員が巻き込まれ，普段以上の力を発揮できた。
- KKGH の発表会では，既に録画したビデオを流す。よって，満足いくまで完成させた作品を提出し，世界各地の参加者のものとならべて観賞することで，それぞれの個性や，表現の多様性に触れることができる。また録画発表なので，演者がリラックスして鑑賞でき，より冷静に，世界の一員としてのメタ的な視点から自らの作品を捉えることができる。

ライブと録画作品，短時間の練習後の発表と作り込んだ作品の発表は，それぞれ別の役割を果たしており，それらをすべて経験することで，一層多様な角度からの学びが得られるのではないだろうか。

3.5　優劣をつけないということ

一般的に発表会というと，順位をつけるものだと思われるが，KKGH ではつけない。それにより，参加者はリラックスして参加でき，観客も発表内容を一つの芸術作品として素直に見ることができる。作る方も見る方も，背景や演出，仕草の工夫，着物風の衣装などを楽しむことができる。また，発表会そのものでは，運営メンバーや同志の観客がライブチャットで掛け声のように各作品にコメントを入れることで，どんな作品でも楽しもうという意気込み，楽しめるという雰囲気をつくることを心がけている。発表会の雰囲気に関して日本語を学び始めて数ヶ月の時点で KKGH に参加したフランスの中学生が事後アンケートに以下の文章を寄せていた：

L’ambiance était très agréable et chaleureuse. Personne ne nous jugeait, mais nous félicitait d’y avoir participer. C'est ce que j'ai pu ressentir même si je ne comprenais pas tout.（原文ママ）

日本語訳：とても温かくて心地良い雰囲気だった。誰も私たちをジャッジせず、参加者を歓迎していた。全部は理解できなかったけれど、私はそう感じました。

演者は発表の観客でもあるため，様々な小噺を見るうちに多様なアイデアに触れ，笑えるものや自分にとって印象深いものを蓄積していく。「こばなし Dojo!」の例にもあるように，他の人がいることで新しいアイデアが湧いてくることが多い。その中で，次の「なりたい自分」（Dörnyei and Ushioda 2009）を見つけて，自主的に改善案を考えていく。実際に，一回以上参加しているリピーターは，オリジナル小噺や，演出にひねりを入れた作品など，初参加の時とは違うタイプの作品にチャレンジすることが多い。また，発表会自体には一度しか参加しなくても，日本に行ったとき披露したり，校庭や遊びの中で演じてみたりなど，小噺で日本語を口にすることに対してポジティブな記憶となり得る。

このように，小噺を通して自己を表現することが楽しく意味のある体験になるよう工夫を重ねている。

4　共生する世界の縮図としての KKGH

KKGH の活動が成立するためには，まず小噺との出会いがポジティブなものでなくてはいけない。日本語教育の場で学習者と小噺の出会いを担当する教師が，自らも小噺の楽しさを小噺ワークショップ（2.2. 参照）や「こばなし Dojo!」のような温かい繋がりの中で体験することにより，教室活動もその楽しさや温かさに染まるのではないか（「学びの同型性」渡部 2020）。また，発表会で教師の出演を必須にした背景には，教師と学習者が共に参加することをきっかけに，同じ目線から語り合う場が生まれてほしいという願いがある（学びの立場のバリアフリー）。

KKGH は，日本語学習者や，先生たちや，その仲間たちが一緒に小噺を通して輪を広め，日本語，文化，表現をみんなで楽しむ会である。本稿では，KKGH の活動と背景を紹介し，バリアフリーの場作りの試みを 2 つの例で具体的に分析した。

小噺という親しみやすく魅力的な素材を通して，バリアフリーで，多様で，皆が自分らしく生きられる世界に出来るだけ近い場をつくる努力をしており，その結果

が，「こばなし Dojo!」，発表会やホームページの形に表れている。

個々の工夫やアイデアが表現されている小噺を並べて鑑賞することで，演じる人も観る人も，上記した理想の世界の縮図を体感し，共に共生の場を創り，変容していく（図 4）。その世界の縮図に共感する人との関わりを紡ぎながら，これからもバリアフリーの場作りを探求していく予定である。

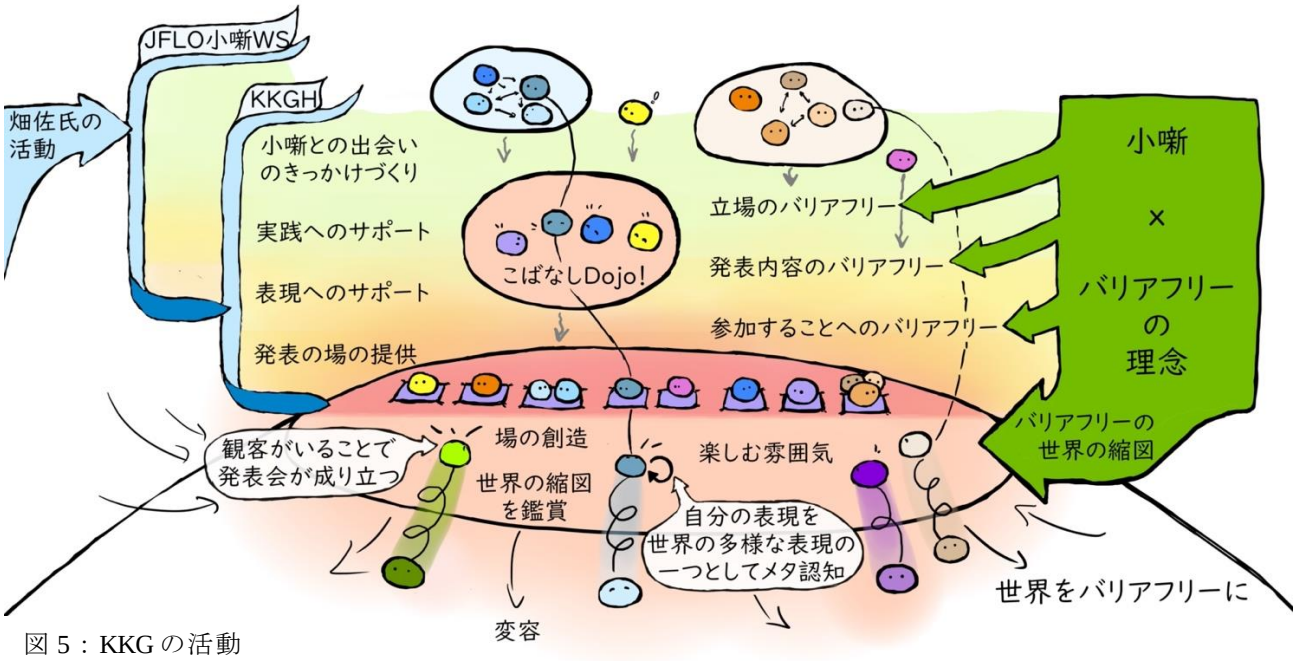

図 5：KKG の活動

＜注＞

1. 小噺のビデオは，KKGH のホームページから視聴可能 https://sites.google.com/view/kobanashifestival/
2. 国際交流基金ロンドン日本文化センター主催のオンライン研修会「教師のための小噺ワークショップ―学習者による小噺パフォーマンスの指導方法―」2020 年 10 月開催。講師は，米国のパデュー大学とミドルベリー大学日本語学校にて日本語の授業に落語や小噺を採り入れている畑佐一味氏である。

＜引用文献＞

川島眞紀子（2022）「2021 年度，欧州各国の先生たちとの協働作業を通じて」世界の日本語教育の現場から（国際交流基金日本語専門家レポート），https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/touou/czech/2022/report01.html（2023 年 10 月 14 日）.

川島眞紀子（2023）「学習者と教師双方における学習プロセス向上のための小噺の可能性」『第 26 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム予稿集』，p.139，ヨーロッパ日本語教師会，https://www.eaje.eu/media/0/myfiles/book-of-abstracts_2023_Ne%281%29.pdf（2023 年 12 月 19 日）.

畑佐一味（2010a）「日本語教育，柳家さん喬，と私」『中央評論』271, pp.63-72, 中央大学出版部.

畑佐一味（2010b）「落語の小噺を取り入れ，笑いながら，日本語力を伸ばす！！」『月刊日本語』2010 年 10月号，pp.70-71, アルク.

藤光由子（2021）『日本語教育アドバイザーの仕事～「学びの舞台」をつくる～』世界の日本語教育の現場から（国際交流基金日本語専門家レポート），https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/seiou/uk/2021/report02.html（2023 年 10 月 14 日）.

渡部淳（2020）『アクティブ・ラーニングとは何か』岩波書店.

Kamura, A. (2022). Let’s Kobanashi! Heritage Language Education: Children’s Kobanashi Presentation. In *Abstracts of Papers Presented at The 23rd BATJ Annual Conference. BATJ Journal, 23.* 101. Retrieved December 21, 2023. https://old.batj.org.uk/images/journal/23/batj_journal_2022_25aug.pdf

Hatasa, K. (2012). Integrating Rakugo and Kobanashi in Japanese Language Classes at Different Levels, *Japanese Language and Literature*, *46*(1). 201-215.

Dörnyei, Z. & Ushioda, E. (Eds.). (2009). *Motivation, Language Identity and the L2 Self*. Bristol: Multilingual Matters.